データからみる家計の変化

衆院選は19日に公示され、31日の投開票に向けて言戦が繰り広げられています。私たちの明日を託す一票はどこに――。選挙連載「その先に見えたもの」第2部は、日々の暮らしに関わる政策を考えます。初回は、統計や調査のデータをひもときながら、家庭の変化を探ります。

その先に見えたもの
2021衆院選
政策編[1]

共働き増 所得は横ばい 00年以降 伸び悩む消費

「どのタイミングで妊娠すれば、いちばん保育園に入りやすいでしょうか」

ファイナンシャルプランナーの畠中雅子さんは、この10年で、こうした質問を受けることが一気に増えたそうだ。仕事に穴を開けず、家計への影響を最小限にしようという、切迫した様子を感じるという。

共働き世帯は、1990年代に専業主婦世帯を上回り、今では2倍以上の差になった。「かつては専業主婦がステータスという時代もあったが、今は夫婦2人の収入で家計を成り立たせているケースが多い。仕事との兼ね合いで、子どもがもう1人ほしくても諦めるという人もいる」

この20年間で、雇用の流動化も進んだ。非正規雇用者も増え、総務省の労働力調査によると、昨年の雇用者に占める非正規雇用者の割合は、男性で22・1%、女性で54・4%。一方、コロナ禍で非正規雇用者は減少に転じており、雇用の調整弁としての不安定な就労が顕在化した。一つの企業に定年まで勤めることも当たり前ではなくなってきており、2019年には、転職者数が比較可能な02年以降で最多の351万人になった。夫の転職による賃金期間をどうやりくりして乗り切るかといった相談も、近年増えたという。

また、夫が家事育児を担う共夫家庭からの相談も、この10年で増えたそうだ。

「20年前は世帯主である夫が正社員という家庭が多かったが、今は働き方も家族のあり方も多様になっている。人生設計もオーダーメイドの時代になってきた」

共働きが増えているにもかかわらず、1世帯あたりの平均所得金額は、90年代半ばをピークに減減し、近年はほぼ横ばいで推移している。14年からは政府が経済界に賃上げを求める「官製春闘」も行われたが、働き手全体の所得増にはつながらなかった。

厚生労働省の国民生活基礎調査によると、生活が「大変苦しい」「やや苦しい」と答えた人の割合は、92年は34・2%だったが、98年からは5割を超え、直近の19年は54・4%だった。2人以上世帯の年間の消費支出は、総務省の家計調査によると20年は333万5千円で、調査方法などに違いはあるものの20年前と比べて約1割減った。通信費は1・4倍に増えたが、教養娯楽費は3割弱減り、被服費も半減している。

海外諸国と比べても、00年以降、日本の消費の伸び悩みは明らかだ。GDP統計の家計最終消費支出は、90年までは年3~5%台で伸びていたが、90年代半ば以降は金額の水準自体は上がっているものの、伸び率が低迷している。大和総研によると、00~19年の実質個人消費の年平均成長率は、G7の中でイタリアについで2番目に低かった。

その要因として、大和総研の神田慶司さんは、人口減少とともに、社会保険料の負担増のために働き手の手取り収入が増えていない現状を指摘する。

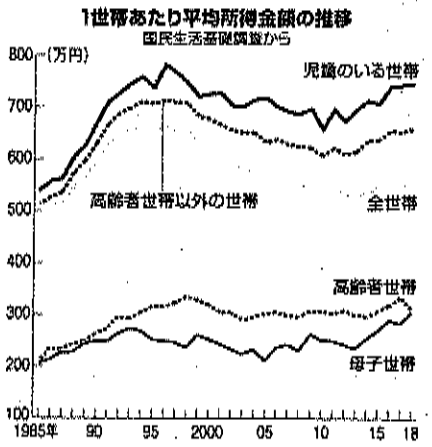
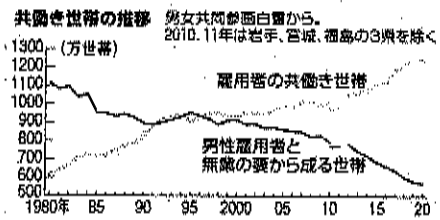
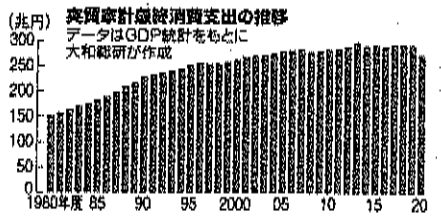
企業などが雇用者に支払う報酬（働く人が負担する社会保険関係費用を含む）はこの20年で1割弱ほど増えているものの、社会保険料の負担増のために、手取り額には反映されていない。家計が負担している社会保険料の総額は、19年度で約39兆円にのぼり、この20年で1・5倍になった。

「手取りは増えず、将来自分たちが給付をもらえるかはわからない。そんな不安が、若い世代の消費性向を押し下げている」

膨らむ社会保障費 「見通し示す必要」

さらに少子高齢化も急速に進んでいる。安倍晋三元首相は15年、アベノミクスの「新3本の矢」の一つとして「希望出生率1・8」を掲げ、保育の受け皿確保などに取り組んできたが、20年の合計特殊出生率は1・34で、5年連続で低下。出生数も統計がある1899年以降で最少だった。

消費が増えなければ企業は利益をあげられず、働き手の給与も上がらない。少子化を食い止めること、そして社会保障の費用をいかに抑えていくかが、今後の課題だと神田さんは言う。

「高齢化が進むなか、社会保障費をぐっと抑えるのは難しいと思うが、ここに取り組まないと、働き手の不安は解消されない。今後どれぐらいの負担が必要なのか、将来どれぐらい給付がもらえるのか、政府が見通しを示すことが必要です」

出産育児一時金や児童手当、幼保無償化など、子育てに関する制度は整備されてきた。畠中さんは、大学進学率が大幅に上がり、教育費が家計を圧迫している可能性も指摘しつつ、「正しい情報を集め、制度を活用し、収入に合わせて自分の生活をデザインすることが大切。積極的に情報に振り回されず、自分に必要な情報を見極めてほしい」と話している。（松本紗知）